

2. 平成13年度 弾力的管理試験実施状況

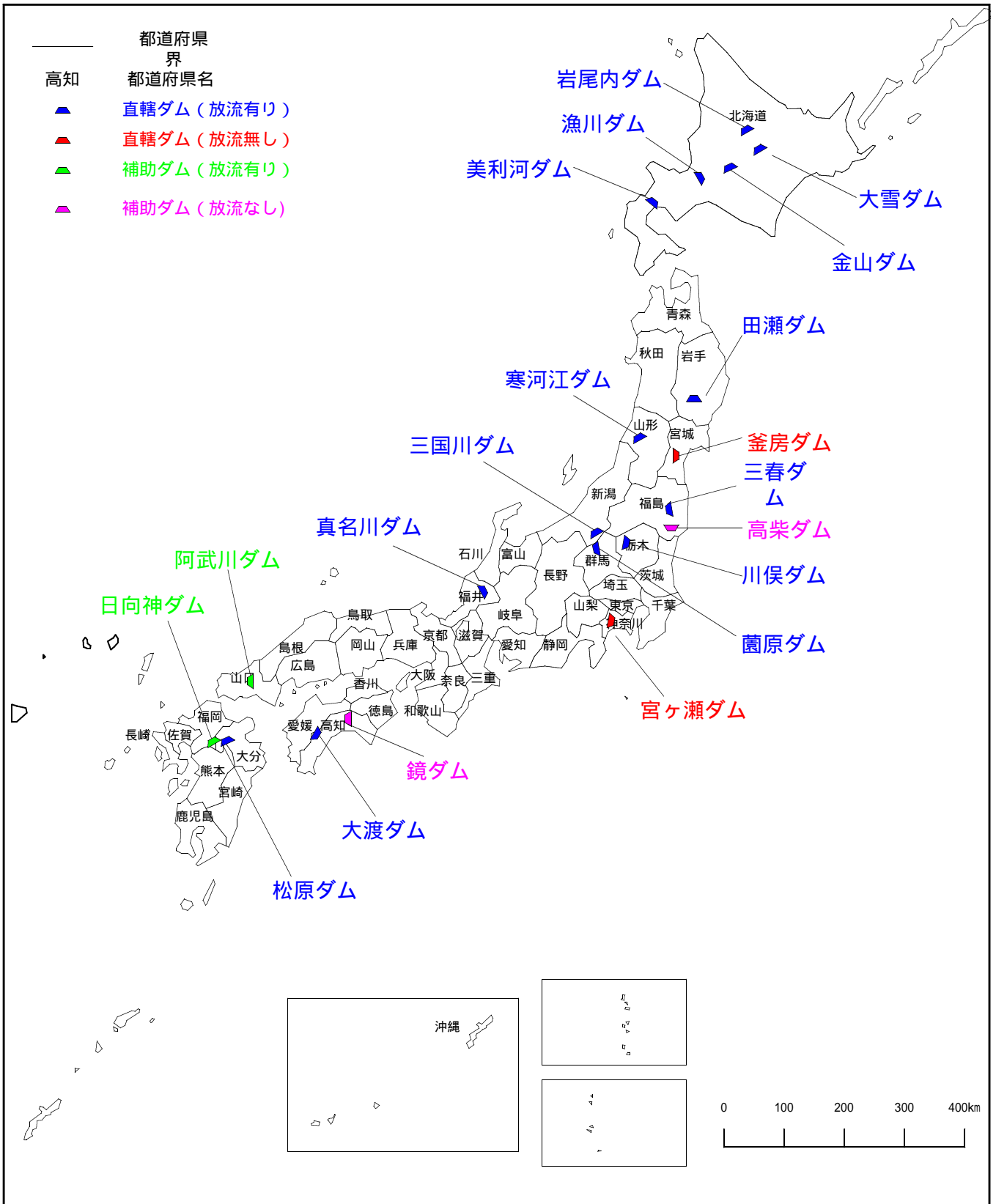
ダム名	累計貯留量 (万m ³)	活用放流量 (万m ³)	事前放流回数 (回)	活用結果等	活用の効果
いわおない 岩尾内ダム	315.3	3.6	0	フラッシュ放流 10m ³ /s, 1 時間, 1 回	活用放流直後の台風の影響により効果が確認できなかった。
かなやま 金山ダム	110.0	81.0	0	維持流量の放流 0.3m ³ /s, 75 日間	ダム直下の湿地では、流水性の水生昆虫の種類・個体数が増加し、生息環境の多様化が確認できた。 また、夜間における溶存酸素量の低下を改善することができた。
たいせつ 大雪ダム	90.0	51.8	0	フラッシュ放流 8m ³ /s, 8 時間, 1 回 4m ³ /s, 2 時間, 2 回 4m ³ /s, 8 時間, 2 回	ダム下流のよどみの水質を改善できた。また、止水性の底生動物が流掃され、フラッシュ放流による河床の攪乱が確認できた。
いざりがわ 漁川ダム	270.9	101.0	2	維持流量の放流 0.3m ³ /s, 39 日間	流量感のある川らしい景観に改善できた。
びりか 美利河ダム	81.7	81.7	0	維持流量の増量放流 +1.5m ³ /s, 5.5 日間 フラッシュ放流 2.5 時間、1 回実施	維持流量の増量放流によりサクラマス等大型魚類の移動を阻害していた箇所の水深が確保され、魚類の遡上・降下などの環境が改善できた。
かまふさ 釜房ダム	474.0	0.0	2	弾力的管理試験期間内は、流況がよく放流の必要がなかった。	-
さがえ 寒河江ダム	170.2	140.0	2	フラッシュ放流 10m ³ /s, 8 回 20m ³ /s, 6 回 30m ³ /s, 2 回	古い付着藻類と、付着藻類に沈積したシルトを流掃することができた。 また、放流規模が大きい方が効果が大きいことが確認できた。
たせ 田瀬ダム	366.0	355.0	0	維持流量の放流 0.7 ~ 9.0m ³ /s, 42 日	ダム直下の無水区間において、ヤマメ、ウグイの生息が確認できた。 また放流中、ダム直下～下流区間において、河川水温の差があるものの確認魚湯種数が増加した。

ダム名	累計貯留量 (万m ³)	活用放流量 (万m ³)	事前放流回数 (回)	活用結果等	活用の効果
みはる 三春ダム	336.5	225.5	1	フラッシュ放流 20m ³ /s, 2時間, 11回	ダム下流河川の止水域に溜まっていたよどみ、水の臭気及び景観阻害の解消ができた。
そのはら 園原ダム	597.0	238.0	2	維持流量の放流 0.3m ³ /s, 70日間	ダム下流の無水区間に流水が流れ、川らしい景観に改善できた。
かわまた 川俣ダム	34.8	6.0	0	維持流量の放流 0.1m ³ /s, 7日間	活用放流できた期間が短く効果を確認できなかった。
みやがせ 宮ヶ瀬ダム	410.0	0.0	0	弾力的管理試験期間内は、流況がよく放流の必要がなかった。	〔弾力的管理試験とは別に、3月にダムの運用操作の中でフラッシュ放流を実施した。〕
さぐりがわ 三国川ダム	30.0	30.0	2	維持流量の放流 0.5m ³ /s, 5日間	
まながわ 真名川ダム	102.0	102.0	0	維持流量の放流 +0.72m ³ /s, 16日間	アユの生息に好適な環境が拡大した。また、景観が改善した。
おおど 大渡ダム	66.3	66.3	0	維持流量の放流 0.2m ³ /s, 37日間	アユの生息に好適な環境が拡大した。また、景観が改善した。
まつばら 松原ダム	260.0	260.0	0	維持流量の放流 10m ³ /s, 3日間	しろかき期における河川の環境流量の低下を軽減できた。
たかしば 高柴ダム	267.0	0.0	5	弾力的管理試験期間内は、流況がよく放流の必要がなかった。	-
あぶがわ 阿武川ダム	107.2	107.2	0	フラッシュ放流 68m ³ /s, 3回 30m ³ /s, 1回	ダム直下及び下流で、汚泥が流されている状況を確認できた。
かがみ 鏡ダム	0.0	0.0	0	流況が悪く貯留できなかった。	-
ひゅうがみ 日向神ダム	300.0	180.0	0	フラッシュ放流 3.6m ³ /s, 2日間, 2回	河口部の塩分濃度及び栄養塩の改善が図れた。

累計貯留量とは、活用容量内で貯留した容量の合計。

(活用放流量又は事前放流量を実施後、活用容量を貯留した場合はそれを加算した量)

事前放流とは、洪水が予測された場合に、活用容量を放流すること。



平成13年度弾力的管理試験実施ダム位置図